

○日本の植物画家たち (1) (小林義雄) . Yosio KOBAYASI: Botanical artists in Japan (1)

昨年10月の植物研究雑誌編集会議の席上、日本植物学会 100 年を記念して盛大な式典と出版が行なわれたので、植物分類学の裏方をつとめてきた画家たちの経歴と業績をまとめておくことも大事であろうという話が持ち上がった。そこでまず私の親しい画伯について書くことにする。

二口善雄氏 (1900～ )

金沢市出身。大正15年に東京美術学校洋画科卒業。昭和のはじめに当時小石川植物園にあった東大理学部植物学教室の専属画家になった。昭和3年に同郷の志保子さんと結婚、現在に至っている。志保子さんは琴の師匠として多くの弟子をとって居られたが、戦後になって織物、草木染めなどを手がけられ、多くの作品を残して居られる。千葉県のその方面の委員にもなられた。

さて、氏は植物の水彩画に関しては我国随一で、とくに洋蘭、椿に関してはその右に出る者は居らない。私の記憶にあるものでは横浜植木会社の委託によって描かれた大判の洋蘭の組合せがある。戦前に中井先生の中学植物教科書の編集を依頼され、彩色画、1 頁大の薬用、有用植物、寄生植物、観賞植物、ツツジ類、海藻などを描いて貰った。戦後の24～25年に文部省よりフォリオ版の理科図集 (原色) が出た。私の記憶する限り10枚1集で8集まで出版された。1枚に2-3種類の極めて普通の植物を載せた。当時は戦後間もない頃に紙質も印刷も良くはなかった。平凡社の世界百科事典にはキノコの組合せ1頁大が載せられている。これは私が氏に依頼して描いて載いたものの一部である。

その後現在までに次の図集が出版された。日本椿集 津山尚 (文) 二口 (画) ; バラ図譜 二口 (画) 鈴木省三・榎山泰一 (解説) ; 原色現代科学大事典 3 植物の部 宮脇昭 (著) 二口 (画)。なお浅山英一氏の著書の画も描いて居られた。

1971年に安達真太郎、太田洋愛、藤島淳三さんなどと協力してボタニカル・アート同人を結成し、作品の水彩画数点ずつを毎秋数日間、新宿の小田急デパートで展示公開するようになった。その後、安達さんの代りに佐藤広喜さん他数名が加わり現在に至っている。

二口さんの画は精巧を極め、葉に虫食いがあれば其儘に描き、或時にはチャワンタケを出す描かれたものは2個が重なったままであった。飽くまで自然のままというのが氏の画風である。

太田洋愛氏 (1912～ )

戦前に太田画伯は奉天 (現在の瀋陽) に在って大賀一郎さんのスマイル図譜の画を描いたのが私の記憶にある最初のものであった。その後新京 (現在の長春) に移り、フリーの画家として活躍して居られた。終戦の年に至り、満州国立博物館の私の研究室で8月15日の開館を目標に多くの絵を描いて貰った。この際に氏に赤紙が来た。その後、内地

に上げられた際に、私は氏の依頼により、友人の石原巖君に頼み国鉄関係の会社で絵の仕事をすることになった。

氏は二口さんとは異なり真に器用な方で、内職に墨絵の懸軸も描かれた。また圖案された満州国の切手の数枚も残している。

次に太田画伯が園芸雑誌に載せた文の少し修正した抜書きをのせる。

「昭和4年、私をはじめ満州教育専門学校教授大賀一郎博士のもと、植物画に専念して以来50数年、半世紀以上が経った。はじめは満州産の樹木の冬芽の図を描いた。次はすみれの標本を集めて、その種類を片っぱしから描いた。解剖顕微鏡を机上の右辺に置いて、私の最初の出版本となったすみれ集の解剖図を夢中で描いた。

昭和8年、私は招かれて満州国文教部の嘱託となり、教科書づくりに精を出した。また満州建国10周年の記念事業として、私は満州植物図鑑の編纂を企画上申した。

私は敗戦の直前の昭和20年8月1日、関東軍に衛生一等兵として現地召集された。8月16日、ソ連軍の捕虜となり、中央アジア、ウズベック共和国の首都タシケントの東方、アングレンという高原で石炭の露天掘作業という重労働に服役した。現在はシルクロードの地としてマスコミにもはやされている地点である。芸は身をたすくの言葉通り、私は捕虜でありながら営内で特別室を貰うけ、営内美化運動をしていた。500~600人が1度に食事が出来るという大食堂が出来あがり、長い壁に壁画を描いたのもこのときである。収容所の営内には、私達が入ソしたとき着けていた防寒外套が被服庫に収められていた。この毛皮を鉄で切り取って毛筆を作った。絵の具は露天掘の開発のために川底に粘土層の出ているものを、ナイフで剝ぎとって飯盒で煮、細かく乾燥したものに、ポピーオイルを混ぜると、油絵具のようなものが出来た。茶色を主として5、6種の油絵具が出来た。こんな材料で描いたウズベックの労働者を、80号程の大きさに仕上げ、タシケントで行われた捕虜の文化祭に出品したこともある。

日頃ひもじい思いを続けて重労働に服していた私どもは、春の若葉はほとんど飯盒で煮て食べた。春、野づらに咲く可愛らしいチューリップの野生種も見つけて描いた。クロッカスの野生種も、ウラル甘草の根も飯盒で煮、甘味料としたこともある。すごく甘かった。少年の頃お寺でもらった甘茶に似ていた。ネギの野生種、リンゴの野生種、おおよその原生種のかずかずを小さな紙片に写しとって、ひそかに植物を描きためていた。

昭和24年、帰国命令が出た。これらの植物画をもっているとスパイの疑がかけられて帰れなくなると戦友がいうので、全部破ったり、焼き捨てたりしてナホトカから輸送船で、舞鶴に着いた。

昭和27~28年頃、前川文夫博士から蘭譜の仕事ももらった。私としては思ってもみなかったことである。」

出版書（植物学者との共著）：原色日本のラン、日本桜集、原色植物百科図鑑、園芸植物図譜。

（国立科学博物館）